

のことは、近所のことだが、無関心でいるとすこしも分らない。たまたま、私は土砂崩れの起る日の朝、裏山に散歩に出て、「危ないな」と感じたのであったが、まさかその日のうちに変事が起るとは、思わなかったのである。

身 辺



病院で

渡部 道子

西区久保町 在住一年 主婦 30歳

近くの小児科の先生に頂いた紹介状を持って市大病院に行ったのは、小雨の降る肌寒い日でした。「おなかが痛い」と二女が時々いうようになったのは、水痘にかかり、それが治り始めたころからでした。「おへ



そのところが痛い」といったかと思うと、すぐ平気な顔をして遊び始めるので、別に気にするほどでもないと思っていました。東北の片田舎で育った私にとって、大学病院なんてまったく関係ないものと思ってその日まで暮らしてきたのです。

幼い子ども三人を連れて、主人と私は緊張しながらタクシーで、病院にかけつけました。間もなく名前を呼ばれ、子どものおなかを診察してカルテに書きこむ助教授の「入院を必要とする」の文字を見たとき、反射的に「入院しなければいけないのでしょうか」と聞いてしまいました。横浜に引っ越して、五カ月しかたっていない私たちです。長女が三歳、三女はゼロ歳、二女の真里子が入院したら、だれかが付き添わなければいけないだろう。我が家のこれからは、いったいどうなるのだろうか、と不安な気持ちでいっぱいでした。

そのときの助教授の態度は、じつに思いやりがあり、気が動転しそうな私も落ち着くことができました

が、空ベッドがなかったため、すぐに入院することはできませんでした。目に黄疸（おうだん）が出ていることや、肝臓が大きくなっている原因を調べる間の二週間くらいということで、小児病棟へ入院し、私と真里子の病院生活が始まったのです。

思いがけない子どもの病気で、私は今まで知らなか

〈横浜の人たち〉

大都市の良い点

- ▼交通が便利……………38%
- ▼教育上便利……………25%
- ▼文化の恩恵を受ける機会が多い……………24%
- ▼買物が便利で豊かな消費生活ができる24%
- ▼いろいろな仕事や職場があり
給料が高い……………22%
- ▼人間関係がわずらわしくない……………13%
・プライバシーが侵されない
- ▼良い点はない……………10% [複数回答]

(49年2月総理府「居住地の魅力度調査」)

総理府全国調査によると、2～3年前の居住環境にくらべて、全国的に良くなったのは「スーパーマーケットなどの整備による買い物の便」と「公園、道路、下水道の整備」で、それぞれ29%。半面、悪くなったのは「交通混雑や渋滞」の28%、ついで「大気汚染や騒音などの公害」が24%となっている。



った世間の一部を知ることができたと同時に、検査に明け暮れた小児病棟での一カ月と、手術するため外科病棟に移ってからの一カ月余りの日々は、私にとってわすれることのできない、貴重な生活だったと思うのです。入院してまず驚いたのは、先生が若いことです。町立病院とか開業医しか知らない私にとって、大きな驚きと同時に、あまりにも若い主治医で大丈夫なのかしら、といちまつの不安を感じたものでした。しかし、毎日熱心に、誠意ある態度で接してくれる先生を見ていると、その不安も消え、すべては神様の……といった、日ごろは神も仏もありやしないのに、なにか人間の運命のようなことをしきりに考えたものでした。「お医者さんになった動機は？」と質問した私に「僕は子どもの時から病気に興味を持っていました。『僕が子どもの時から病気に興味を持っていました。』と答えた結婚間もない主治医の、青年として失ってはならないものを心得ているさわやかな態度に、同じ人間として、ほのぼのとした心のふれあいを感じたことも、病院生活での大きな収穫だったような気がし

〈横浜の人たち〉

大都市の悪い点

- ▼公害がひどい……………60%
- ▼交通混雑……………36%
- ▼自然にめぐまれない……………33%
- ▼住宅事情がよくない……………25%
- ▼人混みがひどい……………25%
- ▼人情が薄い……………23%
- ▼物価が高い……………17%
- ▼風紀がよくない、犯罪が多い……………11%

(資料は右に同じ。全国対象 N=5,000)

地域別に悪い点を見ると、地方中核都市(札幌・仙台・広島・福岡・北九州)では、42%が交通混雑の激化をあげ、38%が公害がひどくなったと訴えている。7大都市(東京・川崎・横浜・名古屋・京都・大阪・神戸)では、「良くなった点はない」という答えが35%もあった。

ます。

全体に明るい感じの小児病棟にくらべ、外科病棟の暗さが、まるで、汚れの少ない子ども心と、灰色がかった大人の心を表現しているかのように見えたのは、私だけでしょうか。先天性総胆管のう腫という病名で、手術室に運ばれて行く子どもの姿を見て、不安



と安どの入りまじった複雑な気持ちでした。おなかに袋ができて、たまっている胆汁を取り出せば、本人も楽になるはずだもの。手術の成功も、やはり運命に従うべきだと思ふ気持ちが強く感じられました。

手術後の快復は早く、七十日間の病院生活に「さようなら」をする日がきました。「退院したら普通の人と変らない生活ができますよ」といつてくれた主治医の、淡々とした話しかたに、なぜか救われたような、そのくせ「本当ですか？」なんてしつこく聞いてみたりして。「執刀していただいた教授にお礼をすべきでしょうか?」「そういうことは一切しないでください」といわれたとき、内心ほっとしていた私なのです。午前九時から午後三時までかかった手術の大変さも、何でもないことのように淡々としていた先生、そして手術の間じつと見守ってくれた小児科の先生、地位も名声も、それにお金もない私たちでも、当然のように思いやりを示してくれた先生と看護婦さんを、これから私は決して忘れることはないでしょう。

きょうまでの私は、人との出会いについて、深く考えたこともなく過ごしてきました。しかし、突然おそわれた子どもの病氣と病院生活で、初めて人との「出会い」の意味を考えることができました。

突然の自覚

阿部めぐみ

保土ヶ谷区上菅田町 横浜生まれ 主婦 25歳

私は横浜に生まれ、横浜に育った。だから横浜市との関係は深いはずであるのに、自分の意識のなかには、横浜のことはほとんどといっていいほど入っていません。学校を卒業してからは、東京の会社に就職した。生まれてこのかた、横浜しか知らない者の東京へのあこがれも手伝ってのことであった。事務をとり、平凡な会社生活の何年かは、自分が横浜に住んで生活していることを忘れてるように無事で、平和的であった。



ある日、東京の銀座にも住んでいたことがあるという、のっぼの青年と知りあいになった。自分では、それほど東京と横浜を区別していないつもりでも、東京育ちという彼の素性に、いつしか心の底に強くひかれていた。身のこなし、考えかた、センス、何をとりても横浜人とは違う何かを感じさせる。それは、一種の恋であったかも知れない。何年か後に、その彼と結婚した。交際期間は長かったが、その間中、彼を思うとき、私の考えかたは、彼は東京育ちであるということが土台をなしているように思えた。私は東京にいる時間が長く、買物、食事、仕事、全部が東京での生活であったので、横浜に住んでいることを感じなくてもしかたのないことであつたかも知れない。

だが会社をやめ、主婦業に専念するようになってからは、そのような無関心ではいられなくなっていた。ある日、突然、具体的な形で、私の意識の中に、横浜市が飛びこんできたのである。

赤ちゃんを出産するのに、どこを選ぶか大きな問題

であつた。いろいろ考えた末、横浜市市民病院を選ぶことにした。大きな病院での診察は、時間がかかり、あまり親切ではないと聞いていたが、何か突発的なことがあつたとき、助けてくれるのではないかと、自分勝手なことを考え、診察を受けた。思ったとおり、半日をつぶして、やっと五分くらいの会話のあと、出産を病院でできる予約をとつた。予約をとることは大変なことらしかった。

このようにして、毎月一回、七カ月を迎えるまでかよつた。突発的なできごととは、八カ月に入って、思いがけずやってきた。足が重くなり、血のかたまりのようなはれものが、みるみる大きくはれあがつていったのである。病院にかけつけてみると、いつもいっばいの待合所が、がらつとしていた。休診日なのだ。そんなこともいってられないので、窓口をたたいてみると、親切にみてくれた。医者も待機していて、その場で切開し、血を出して「安静にしていなさい」といわれ、帰された。翌日、きずをみてもらうため出向いた



ら、またまた違ったところにはれものがあるとか、至急入院するようにいわれた。大変なショックである。午後より、私は白いベッドの上の人となった。生まれて初めての生活で、それに興奮も手伝って、その日は熱が出て、大変疲れてしまった。

入院してみても驚いたことは、看護婦さんが皆とても親切であったこと。緊張していた気持ちを、やさしくほぐし、つつんでくれた。用事があるときはブザーを押すと、きびきびした動きで、美しい笑顔をみせてくれる。「白い天使」といわれるが、その言葉のとおり、いやな顔ひとつせず、手順よく気持ちよくみてくれる。最後には必ず「心配いりませんよ」といって、にっこり「いつでも呼んでくださいね」と姿を消していく。

病状もよくなり、退院の日が決められ、退院手続きと入院費用の精算がおこなわれた。そのとき、一枚の領収書を見て、はっとした。それには、最後のところに「横浜市立市民病院 横浜市長」として印が印刷さ

れていた。このとき、ああ自分は横浜に住んでいるのだ、横浜に生活しているのだと、しみじみ感じていた。あの親切で思いやりのある医師も看護婦も、入院生活全部が、市から与えられていたものなのだ。遠く、うとましいと思っていた市政が、このような形で自分の前にあらわれたとき、気はずかしさに、身のち

〈横浜の人たち〉

親しみ・その1

横浜市	70%	10%	16%	4%
	親しみがもてる	親しみがもてない	どちらともいえない	答えない
男	74%	8%	16%	2%
女	66%	12%	17%	6%

(49年4月都市研調査 N=915)

居住年数が長い人ほど横浜に「親しみがもてる」。出生地別にみると、「親しみがもてる」のは横浜生まれで9割近く、北陸・甲信越生まれで7割以上だが、東京生まれや近畿・中国・四国生まれでは55%前後に下がり、逆に「親しみはもてない」人がそれぞれ2割前後となる。また、横浜を選んだ理由に、「東京に近く、暮らしやすそうな感じ」をあげた人では「もてる」が6割。2割近くが「もてない」で、期待と現実とのずれをみせている。



我が家は、主人日野小教員二六歳、長女麗一歳十一カ月、長男剛八カ月、私の四大家族。学生結婚して、子どもがすぐできたため共働きができずに、四人の生活が主人一人の肩にかかっている。ペースアップされたとはいえ、物価高騰には追いつけない。

六畳一間のアパートで、七時起床、朝食。八時、主人を送り出し、子どもを遊ばせながら、洗濯、そうじをすませ、雨の日以外は外に出る。剛をおんぶして、麗に運動させる。アパートの前の空地で、そばを走る鎌倉街道に気づかないながら、日なたほっこを兼ねながら

八軒の共同風呂

伊藤 イツ子

港南区日野町 在住二年 主婦 24歳

ぢむ思いであった。これからは、強い関心と理解をもって市政を見守ろう。一家の主婦として、また新しく誕生する横浜人のためにも。

ら、遊ばせる。それでも、繁華街よりはましかと日光を仰ぐ。ときには、麗はあきて「散歩」と称して近所を歩きまわる。垣根が青々と萌えたぎるのを珍しげに取るうとして怒られ、石ころを溝に落としてしかられる。東北の農村で育った私は、子どものころ、小川で精いっぱい遊び、ぐしょぬれになっても帰りもせず

〈横浜の人たち〉

親しみ・その2

横浜に親しみがもてる理由としては「長く住んでいるから」がもっとも多く、これに「都会らしさもあり生活も便利だ」「港もあり町に情緒やうるおいがある」「つきあう人たちに親しみもてる」などが続いている。逆に親しみもてない理由では「これまで暮らしたところよりも住みにくいから」といった、他地域と比較する見方もあり、また「町にうるおいがなく公害などで環境がよくないから」と横浜自体の居住感に関連する見方もある。

〈参考〉 愛着をもっている 76%
愛着をもっていない 22%

7大都市 (N=642)	非常に ある 28%	ある程度ある 48%	あまりない 18%	全然ない 4%	2%
					わからない 答えない

(49年2月 総理府「居住地の魅力度調査」)



に、野の道でスカンポやタンポポを取ったり、レンゲやクロローパーの花で首飾りを作ったり、裏山を走りまわったりなど、楽しい記憶がなまなましいのに：子どもを怒ったあと、憐びん・同情の念が浮かんでくるのだが、禁止せざるを得ない。

昼、アパートに帰り、昼食をとり、二人の子どもが昼寝。この間一時間半か二時間くらい、唯一の私の時間。新聞、読書、勉強と、やりたいことを短時間で終える。子どもが起き出すと、遊ばせながら洗濯物をたたみ、夕食の準備をする。四時ごろ、子どもにせがまれ、近所のお兄ちゃん、お姉ちゃんと一緒に遊ばせる。五時過ぎイヤイヤする娘とアパートに帰る。

食事をすませ、風呂に入るのだが、八軒で一つの共同風呂に入るのだから、風呂当番がまわってこないとなかなか入れない。当番になると一番に入れるのだが、それ以外は十時になっても入れない時がある。子どもはぐずり出すが、風呂が一日おきなので、休むと三日も風呂に入れないので、努めて入れることにし

ている。しかし雨の日などは、風呂が外なのでついおっくうになる。(銭湯は遠いし、お金もかかる)。子どもを寝かし、テレビを見たり、主人と話をしたりしながら、つくろい物、編み物などをする。

雨の日は、洗濯物がつきさがっている下で、所狭しとかけまわる子ども。表へ出ようとせがむが、外は雨だから行けないのだということを、納得させるのに一苦労。あちこち、いたずらが始まり、いらだつ。さわられたくない物は、手の届かない所に置けというが、それだけのスペースもなく、子どもは知恵づき、いたずら盛りとなる。子の成長を喜びながらも、いらだつ自分を後悔するが、やっぱりいらだつ。何かにぶち当たりたい心を選挙の一票にかけるが、全然変らない。主人は、仕事をできるだけ家に持ち帰らないようにしている。子どもが生活するだけで、主人が仕事するスペースがない。仕事があるときは夕食後、夜道を学校へ向かう。とうちゃんがなげれと送り出す。

日曜日、我が家の唯一の道楽の車で、海、自然の



森、公園などへ出かける。帰りにスーパーに寄り、近所の店より安い物を買いだめする。それでも給料日ま近になると、乏しい財布を手に、近辺を散歩する。車の維持費が大変だから車を売れば、といわれるが、我が家のうるおいだし、主人の楽しみだからと思うと、事故や排気ガスを思うと肩身が狭くても売れない。ボーナスや差額が出たときは、貯金にまわしているが、一生かかっても家一軒、マンションだって買えやしない。子どもと一緒にチューリップとレタスを育てるなんて幻想にすぎない。県営、市営住宅を申し込むのだが一向に当たらない。

もうじき子どもが幼稚園。公立の幼稚園は、人数が限られているし、それに近くにないため、どうしてもお金のかかる私立幼稚園だ。年子をかかえた我が家は大変だ。公立の乳児院、保育所、幼稚園などがたくさんあって、女性が一生安心して働ける場が欲しい。子ども、女性の福祉など政治屋には眼中にないらしい。また、秋には子どもが生まれる。母子センターで

は安く生めるそうだが、二人の子どもを連れてバス、電車と乗りかえて行くのは、途中で陣痛がおきたらなど考えると、高くて近所の病院に行く。子どもは、将来を考えるとこれ以上生めない。墮胎を勧めてくれる人もいるが、墮ろす気にはなれない。あとはつくらないつもり。

牛乳、石油、ガソリン再値上げ。何で工面するのか。子どもたちの洋服は、いっさい親戚からお古を頂いたり、リフォームなどする。栄養を考えると食費は削れないし、現状では、子どもを考えると外へ働きに出れないし、内職の手間賃は安いし、何か家の中でできる仕事の技術でも身につけようと通信教育にいそむ。子どもが巣立つ日进行い、やりくりしながら過ぎ去る日々。生活のうるおいをなくさないように心がけながら、秋には六畳一間に五人。どのように布団を敷こうかなど考えている。前の空地を見て、つくづく思う。この空地の十分の一でも我が家のためにもらえたら……。



私の横浜

二十一年十二月のこと

山田 澄子

保土ヶ谷区西谷町 在住三三年 主婦 52歳

事情があつて東京から横浜の保土ヶ谷へ移り住んだのは、昭和十六年初夏のころでした。当時、娘の私は、まだ東京の会社へ毎日通つていました。夕がた、退社して、横浜で国電を降り、相模鉄道のホームへくると、電気はうすぐらく構内は汚なくて、そのうえ、黒い煙をもくもくとあげた電車が入ってくるのです（それは貨物電車か、またはそれに私が乗ったのかは忘れませんが）。正直いって、いやでいやでたまりませんでした。まさか、この電車がまもなく始つた食糧危機を救ってくれるとは、夢にも思いませんでした。

そして、やがて戦争に入り、私の町が焼け出されたのは、二十年四月十五日の夜でした。焼いだんの降る中を、藤棚の丘の上の当時の一中へ避難して一夜を明

〈横浜の人たち〉

定住性・その1

横浜	移りたい 移る計画 がある	移れない わからない	永住する つもり	準備中 準備なし	不満あり 満足している
	38%	7%	9%	36%	10%

(49年4月都市研調査N=915)

7大都市 (N=642)	移り住まざる たいをえない	住んでいたい わからない	56%	8%
	22%	14%		

(49年2月 総理府「居住地の魅力度調査」)

いまの住居に永住する、または移れない人は45%、逆に移る計画や希望のある人が45%で、両者は互角の割合である。7大都市の平均にくらべて、横浜では移る計画のある人の割合が多く、市民の流動性はきわめて高い。

し、翌日まぶしいくらい快晴の空の下を、空襲を受けない、楽しそうな家々の並ぶ道を、一晚中眠らないで自分の町の赤々と焼けるのを見ていた私たちは、おし黙って、重い足を引きずって焦土へ戻って行きました。

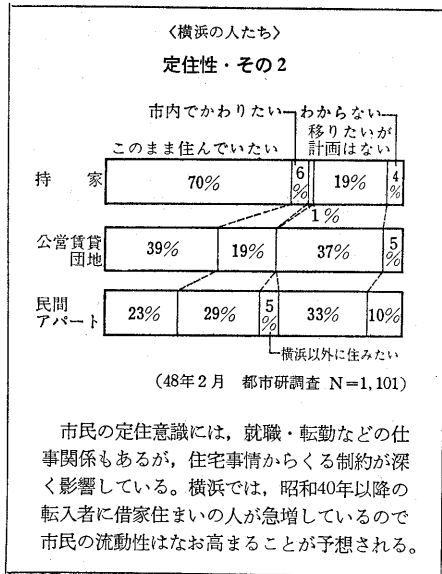
それからずうっと終戦まで、いいえ、戦争が終つて



も、まだまだアメリカの食糧放出があっても、みんな毎日空腹のあけくれでした。相模鉄道へ乗っては、さつまいも、押麦、粉その他なんでも食べられる物をさがしに行く日が続きました。

そのうち二十一年十二月の末に、私にとって忘れることのできない災難がおこりました。例によって買出しに出かけ、さつまいも六貫目に入った大風呂敷をしょって駅を降り、もうすぐ家だと足を早めて歩く私の前に、突然大男が立ちはだかりました。見れば横の米軍かまぼこ兵舎から出てきた若い米兵でした。何かいいながら手を引っ張って、兵舎のある方へ連れこもうとするのです。私は驚いて反抗し、少しでも自分の家の方へ近づこうと争いました。酒くさい息を吹きかけてからかう米兵に、私は必死の力で、はむかいました。そのうち一番うえに着ていた紺の事務服の片袖は、肩から引きちぎれました。それでも反抗を続けていると、そばの背丈より高いみぞに、放りこまれました。幸い水は少しきりありませんでしたが、それでも

足は水につかり、こわさと寒さに歯の根も合いませんでした。めがねはとばされ、せっかく買ったオイモは、みぞに落ちた時に肩からはずれ、散乱してしまいました。下から助けてくださいとたのみ私に、米兵は笑いながら上を見ています。少したつと手をさしのべて上に引きずりあげてくれ





るので、やれやれ助けてくれるのかと思えば、また連れて行こうとします。いやだと反抗するとまたみぞに落されるのでした。頭をコンクリートの角でぶつけてけがもしました。そのうち、夕がたの退社時になり、日本人が三々五々とおりかかるとは、横目で見てさっさと帰って行きます。近くにある交番へ行ってくれる人もありませんでした。そのうち米兵がちょっと姿を消した間に、とおりがかった親切な人が、や々と助けてくれました。後で近所のかたがいわれるところでは、米兵が戻ってきてさがしまわったとのことでした。

お医者へ行つて頭の傷を縫ってもらい、帰りに交番へ届けました。いあわせたおまわりさんは、驚いて「よくがんばったなあ。この帳面は、この管内だけで暴行を受けた調書だよ」とぶ厚いノートを見せて、私の無事を喜んでくれました。

今でもベトナムなどでの悲しい話をきくたびに、三十年近く前のことがありありと思い出され、戦争と

は、表面に出ない悲惨なことがらがたくさんおこる、絶対にしてはいけない争いだと思います。

ボーイスカウトとともに

仲戸川 豊

金沢区平潟町 在住二七年 会社員 34歳

戦後の昭和二十一年に、私たち一家は台湾から引揚げてきた。父の故郷である高座郡の上和田というところであった。今では大和市になって、大変ひらけた郊外都市になっている。半年余りたつてから、父の勤めの関係で磯子区、現在では金沢区に分かれているが、町屋町に引越してきた。幼少時代からこんにちまで、まだ公害などまったくなく、空気のきれいな金沢の地で過ごしてきた。冬は比較的暖かく、夏は潮風の香りの涼しい地である。

戦後まもないころ、昭和二十六年、この地にもボーイスカウト運動の発足をみた。昭和の初期、そのこ

る、父も青少年活動に関心を寄せていたゆえ、私達兄弟がボーイスカウト活動に参加することを、積極的に賛成してくれた。まず二つ年上の兄がボーイスカウトに入隊。私もつづいて入ることになった。学校の勉強には、逃げ腰の腕白少年であった私も、不思議にスカウト活動には興味があった。今のカブスカウト諸君もみな、同じようである。良きリーダーに恵まれ、年々スカウトたちは増えていった。昭和二十八年ころからスカウティングに励んでいる我々仲間、今ではみな、良きリーダーとして、後輩たちの育成に活躍している。思い出深い第一回日本ジャンポリー、当時はまだ自然そのものの地であった。現在では都会化され、避暑地となつてしまつてゐるが、二十数年前には、まったくその気配はないところであった。その後四年に一度開催される日本ジャンポリーにも、毎回欠かさず参加してきた。ボーイスカウトからシニア、ローパーと年齢とともに上進し、私の人生の前半である少年時代から青年時代を、スカウト活動の歴史とともに歩ん

できたといつても過言ではないだろう。横浜市の印象的な行事である港まつりにも参加行進した。

横浜市の人口増加とともに少年たちの数も増え、それに加えて教育熱心な母親たちの目ざめが、ボーイスカウト活動にもむけられてきた。リーダーの不足などで、この良き青少年活動の輪が広げられないのが残念である。横浜市にも海洋少年団はじめ、数種の団体があるが、私はボーイスカウト活動できたえられた少年たちの訓練、規律などが一番良いと自負している。それは、私が歩み育つてきた人生の一部であるからかもしれない。少年時代、リーダーに限りないあこがれをもつていたのをなつかしく思い出すのである。夏の日のキャンプのための計画、準備。春秋のハイキング。また、月例の隊集会といったどれをとつても楽しいものの陰には、奉仕活動が組み入れられている。ボーイスカウトたちの去つたあとには、ゴミ公害などといったものは残つていない。それはベーターテンパウル卿のいわれた「唯、感謝のみを残して去れ」という教えが



生かされているからであろう。

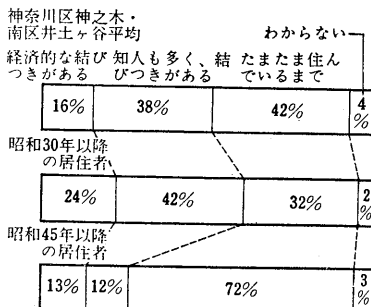
学校での勉強がきらいで落ちつきのない子、知能が高いのに成績があがらない子。このような子どもたちは、ボーイスカウト活動が最適であると、心理学者、教育者も認めている。また、その実例もいくつか見えてきた。両親の理解と協力、リーダーの良き指導のもとに若い芽は、すくすくと育っていく。そして、次の世代に受けつがれていくことを思うとき、私の生きがいは心の張り合いともなっていくのである。大学入試のとき、入社試験のとき、私は、趣味はボーイスカウト活動ですと答えてきた。そして、それを実践してきた。

もう何年かたつと、自分の子どももカブスカウトの年齢になるだろう。そのとき、親子二代、そして兄弟たちとそろってスカウト活動に励み、良き市民としての一員になることを願っている。昭和四十六年に、朝霧高原で開かれた世界ジャンボリーに参加した。学生時代に通じなかった英語が、片言のブロークンイング

リッシュとゼスチャーで、外国のスカウトに通じたとき、私はこの世界ジャンボリーに参加した喜びを味わった。そして、友情を身をもって体験し、世界は一つだと感じたのである。平和な時代の尊さ、生命の尊さを痛感したのである。通俗的な歌にあらわれてくる横浜だけではなく、良き市民たることをねがう「市民活

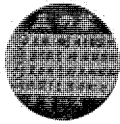
〈横浜の人たち〉

地区との結びつき・その1(横浜の場合)



(48年3月都市研調査 N=804)

4割強の人が「たまたま住んでいる」と答えた。しかし、持家・借家を問わず、一戸建住まいの人では、居住年数が長くなれば、地区との結びつきも強まる傾向がみられる。



偶然のきっかけで四国の山奥から横浜に出てきて、

「京浜東北大学」

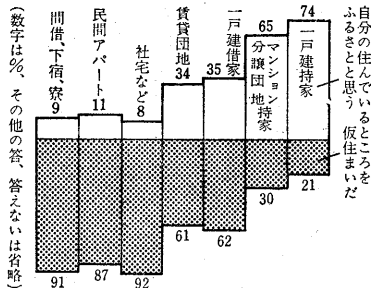
磯子区洋光台四丁目 在住一四年 高校教諭 37歳

伊川 公司

動」の一つであるボーイスカウト活動をおして、私
は今日もまた、スカウト活動に励むのである。
私が有意義な青少年時代を過ごしてきたように、次
の世代をになう少年たちとともに、私も活動の輪に加
わっていきたいと思っている。新しくスカウトになっ
た子どもたちの自転車はみな、ピカピカであった。隊
長である私の自転車は半分ポンコツ。それでも、心は
晴れ晴れとしていた。横浜の空もそんな心のように、
そして海もきれいであった。人々の心も、なご
やかな環境から生まれてくるものであった。ヨコハ
マ、それはエキゾチックな響きとともに、印象の良い
ところにしたいいものである。

東京の大学に通学しているうちにそのまま住みついて
しまい、こんにちに至っている。その間、四年間、八
丈島に抜けただけで、自宅からいまも片道二時間もか
かる道のりを宿命のごとく通勤している。
はじめは、桜木町から本町に続く道筋や元町、中華
街、伊勢佐木町の町並みに代表される横浜の細長い町

〈横浜の人たち〉
地区との結びつき・その2(東京の場合)



(48年10月 社会調査研究所調査 N=1,000)

東京区部では、いま住んでいるところを
「ふるさと」と思っている人が49%、「仮住ま
い」は47%となっている。



私の横浜

々が、なぜか心細く親しみを感じさせないものであった。それに倉庫の多い港のもつ暗さ、不安、不気味さも加わり、しょせん横浜は、旅愁をそそり、人々が心を印して、通り過ぎて行くにふさわしいところであり、結局は住むには適さないところというイメージが強いといったようなことを人々から聞き、私もそのように思ってしまった。

社会人となって、下宿から現在の地に住居をかえて、東京都内に通勤する立場となって、横浜は親しみを増したものの、それは夜のベッドとしての横浜で、けっこう静かに眠れることだけに安心したものであった。

日の出とともに別れを告げ、日の入りとともに再会するだけの横浜が、私の心にすっかり自信と郷土愛をはぐくんだのは、横浜の郷土文学を知ってからであった。

はじめは「京浜東北寝台車」と自称して、座ったまま眠るコツをおぼえたものの、しだいにこの時間こ

そ、家では家内と子どもに、職場では仕事に追いまわされる身にとって、まさに唯一の一人になれる場所、貴重な時間であることをさとり、読書に使うようになった。「京浜東北寝台車」は、たちまち「京浜東北大学」となったわけで、そこで文学のなかに横浜がじつにしばしば描かれているのをみつけ、横浜に住んだ文学者の意識を知るうち、読書はしだいに「横浜の文学」といったものにしぼられていたのである。

そのきっかけとなったのが、中島敦である。「山月記」を中心に、その短篇を読むうち、わずか三十四歳で病死したこの偉大な文学者が、死の直前、病軀（びょうく）をようく）をおして小笠原や南方へ旅行する。そのなまなましい生命力を見つけ感動したが、この文学者は一時期、中区本郷町に住み、横浜高女で教鞭（きょうべん）をうべん）をとっていたのである。横浜での港をながめる生活が、南洋への夢を実現にもっていったのである。

また、抒情詩人北原白秋が、人妻との恋愛事件をおこし投獄され、出獄後、秘かにその俊子とかくれ住ん

て、「桐(きり)の花」の校正をしていたという本牧の家を私は知っている。その文学研究上の意義も、この「大学」で学んだ。

間門の「間門園」近くの洋品店で下宿していたので、山本周五郎のうわさをいろいろ聞くことができた。その生活ぶりも、たびたび衣料品を買いにこられた奥様の聞き書きで読むことができた。

こうしたかわりが、私の文学への関心をそそるもとなつた。

近代文学を生み出す先駆けの役割りを果たした仮名垣魯文は、作品のほとんどに横浜の異国情緒をとり入れている。小田原生まれの北村透谷は、明治十六年に神奈川県臨時書記となるため、横浜に移り住んでいる。有島武郎は「一房の葡萄」で描いているように、税関長の息子として成長したのであった。

島崎藤村には、伊勢佐木町の通りにある日用品を掛け値なしに売る、便利な高橋雑貨店の様子を描いた「雑貨店」という短篇がある。永井荷風も「あめりか

物語」「野心」などで横浜の当時の姿を描いている。森鷗外は、横浜市歌の作詞でも有名であるが、この偉大な文学者の多くの作品に横浜が登場してくる。現代作家の作品にも、じつに多く登場してくる。横浜のこここに、文学者の心が光っていることを発見するのは、格別である。これからも文学をとおして、横浜を新鮮に見つめていけることを幸せに感じている。

歌とともに四十年

渡辺はま子

中区山手町 横浜生まれ 歌手 64歳

私の初舞台は、開港記念会館で「青葉の笛(ふえ)」を歌った。付属小学校四年生のころだった。楽譜の読み方も、苦もなく覚えられた。教えてくださった桜井ケン先生が今もなお、お元気なのはうれしい。

捜真女学校に入って、賛美歌が楽譜を読むよい教材だった。チャペルではいつもメロディでなしに、ハー



モニーの方を歌っていたので、それが目立ったのか、音楽の山鹿先生から本格的に勉強するようにとすすめられ、その気になった。そして、武蔵野音楽学校へ。卒業のころは希望に燃えて、盲蛇は、世界のオペラ界へ、なんて夢も、戦争勃発で泡と消えてしまった。そのためレコード歌手としての、私の道が開けてきたのだった。

レコード界に入って、忙しい月日がたった。どんなに疲れて帰っても、横浜へ帰るとホッとして心が安まった。港横浜が好きなんだ。子どものころ、廻り道をして港へ行つては船を眺めた。この海を越えて祖父母は、アメリカへ行つたのだった。そして二度と帰らなかつた……等々。この外国船のどれに乗つてもアメリカへ行けると真剣に考えたものだった。ある時は、外国船の上から船員が手招いているので、ステップを登りかけて、巡視のおじさんに「何処へ連れて行かれるかわからないよ」と、叱(しか)られたことは今も鮮やかに覚えていゝる。でも行きなかつた。私は祖父母を

知らないのに。

そして戦後(昭和二十五年)、初めて歌の使節として渡米できたとき、限られた日数の中でシカゴ、オークウッドの墓地を探し当て、苔むし朽ちかけた祖父の墓石を発見、ひと握りの土を母へのみやげとして持ち帰り、子どもの夢を実現できたのだった。祖父母

〈横浜の人たち〉
住宅所有関係の割合

都市名	総数	持家		借家		与借	間借
		%	%	%	%		
東京都区部	100.0	37.3	6.1	47.0	7.1	2.5	
大阪市	100.0	32.9	10.2	50.7	4.8	1.4	
横浜市	100.0	46.8	7.1	35.3	9.2	1.6	
名古屋市	100.0	39.9	9.5	40.8	8.7	1.1	
京都市	100.0	47.5	3.3	42.8	4.2	2.2	
神戸市	100.0	39.1	8.2	44.7	6.5	1.5	
札幌市	100.0	35.9	4.9	42.5	12.7	4.0	
北九州市	100.0	38.2	9.6	36.8	13.7	1.8	
川崎市	100.0	33.7	6.5	48.0	10.1	1.6	
福岡市	100.0	36.5	11.9	38.9	10.6	2.2	
10大都市平均	100.0	38.3	7.3	44.6	7.7	2.1	
全国	100.0	58.2	6.3	27.3	7.0	1.2	

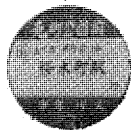
(45年国勢調査)

横浜で持家に住む世帯は46.8%。この持家率は、全国平均よりかなり低いが、10大都市のなかでは2番目に高い。

の霊の導きか、死後四十年たっていた。「支那の夜」が、ヒットしたおかげだった。

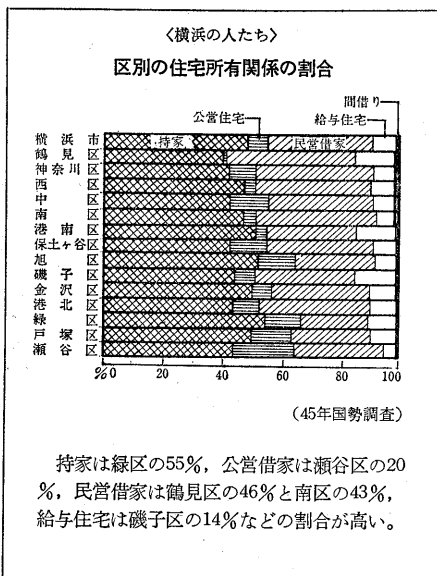
戦時中、私はじっとしておられず、全精力を職場に、農村に、病院に、軍の慰問激励に、飛びまわった。二十年七月末、単身新潟から貨物船に乗りこんだ。これが最後の中国行だった。二十日間の慰問で戦争は終わった。女一人、外地で頼みの軍隊が敗れたとき、誰に、何処に頼ったら良いのか戸惑った。自分が自分を守らねば、誰が助けてくれるか……を自覚した。自分が強く正しければ、真心は何時でも、何処でも通じることと体験した。幸い中国は、道義の国だった。歌が歌えたことが、どんなに身を守るに役立ったか……歌を勉強させてくれた両親に感謝した。

華北（北支那）に散在していた軍人及び邦人は、天津の貨物廠に集結させられた。捕虜生活が始まった。初めは進駐してきた米軍の管理下にあり、翌年一月から中国側の管理下に置かれた。何時帰れるかわからない収容所で、乗船するまでの五カ月間、日本人はもち



ろん、中国兵（毎週土曜日）、米軍の慰問と馳けまわり。少しでも役に立つようなことは進んでやった思い出は楽しい。

二十一年五月四日、佐世保に引揚げ入港。初めから連れて行った伴奏者と現地で最後まで伴奏してくれた二人の家族と一五名、ひとグループで帰ってきた。上





陸と同時に米軍の目に止り「楽器を何故持ってきたか」と問いただされ「歌手もいるのだ」「それではこちらにこい」と米軍のトラックに乗せられた。それから一週間、米軍のキャンプ慰問を命令された。でも毎日面白おかしく御馳走になり、お金を頂き、無事に帰れたのは「芸が身を助ける」ことわざどおり本当に幸運だった。

戦後の混乱期に警察予備隊ができ、自衛隊となった。私は進んで慰問に行った。私には慰問が身にしみついていたので。つたない私の歌を喜んで下さる人がいるということが、私をかり立てる。だから戦犯者の収容されていた巣鴨拘置所の閉所式まで行ったし、二十七年の比島モンテンルパの獄舎にも単身で乗りこんだ。マヌス島戦犯者の歌も歌い、励ますことができた。戦後初めて建てられた硫黄島の慰霊碑の除幕式にも、半年後、若い自衛隊員の慰問、サイパン島の慰霊碑、比島カリラヤの丘の慰霊碑除幕式にも行って慰霊歌を歌いに進んで行った。

多くの犠牲の上に建てられたこの日本の平和と幸せを護らねばならない。私達は長い戦争の苦しみを忘れてはいない。「降りくる火の粉は払わにゃならぬ」と歌もある。隠忍自重、国を護る精神に燃えてゐる自衛隊に何故、こと毎に反対を叫び、隊員募集にも応じない市の方針は何かしら。風水害・地震・自然の猛威に救いを求めるのも訓練され組織だった自衛隊でしうに。

何処の国に軍隊の無い国があるでしょう。ひたすら自ら護る立場の自衛隊の姿を私は美しいと思う。だから、この春、沖縄海上自衛隊航空隊一周年式典にも行ったし、鹿屋航空隊の二十周年の式典にも伴奏者を連れて行った。

戦後三十年、この変動の世相を、時々私は忘れかけられた多くの「英霊の怒り」ではないかとさえ思われなければならない。

私は咽喉（のど）と体の続く限り何時でもお役に立ちたいと思っている。

感謝、海よりも深く

鈴木 清

港南区日野町 在住七年 会社員 40歳

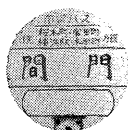
私が「国際港都横浜」にかかわりあった最初は、零歳児の長女をかかえた妻が四カ月の身重のときであった。西も東もわからぬ新居住地で、まず、その対策のために電話したのは、「横浜市愛児センター」であったが、人口急増都市としての横浜は、私の期待を裏切るものでしかなかった。急を賭しての電話によるその「場」を探求して、やっとの思いで、「安心」の「場」としてのA病院の産婦人科の予約を得るまでの不安は、はかり知れないものであった。

かくして新たな市民として、生を得た次女も星霜を数えるに及んで、三歳になんなんとしたとき、長女とともに「保育所」にお世話になろうと思立ったが、それがまた、一苦勞であった。とき、あたかも、革新

市政としての飛鳥田横浜市政は、「子どもを大切にす
る市政」を行政姿勢の一つの柱としていた。しかし、
その窓口機関としての福祉事務所の応待は、意外に
も、冷たいものだった。

本来、法律上、「市町村長は、保護者の労働または
疾病などの事由により、その監護すべき乳児、幼児ま
たは……児童の保育に欠けるところがあると認めると
きは、それらの児童を保育所に入所させて、保育しな
ければならない」（児童福祉法第二四条本文）と規定
されている。しかし、横浜市には、「保育に欠ける」
児童に備えるだけの保育所などの施設が、整備され
てはおらなかった。諸般の事情で、その条件が完備され
ていないのが実状であるとしても、同法同条の「但し
書き」は、その実状をも許さぬ建前である。その規定
においては「但し、付近に保育所がない等やむを得な
い事由があるときは、その他適切な保護を加えなけれ
ばならない」との市町村長に対しての代替義務が課せ
られているのである。





それらを前提条件としたうえで、福祉事務所の「冷たい」対応とは、次のような次第であった。「保育所は、その需要に対して、極めて不足気味なので、ご自身で入所できる保育所を探してもらえらるならば、当所としては、ご希望に添える配慮を致します」とのことであった。この場面にもる限り、法の市町村長に課している義務、とりわけて、その「但し書き」は、完全に空文化しているのであった。

やむを得ず、不知不案内の新居住地において、知恵と勇気を振りしぼって、横浜市長の指示である同福祉事務所の見解に添い、やつとの思いで、入所させていただけのべき私立保育所を探し当てて、わが子二人を保育所に入所させることができた。その苦勞を耐え忍んできた身であればこそ、金輪際、つぎの市民には、この轍（てつ）を踏ませるべきではない、と、強心に秘めてきたし、今も、その念には変りがない。

「子どもを大切に市政」には、裏切られた気持ちもしたが、その私立保育所は、皮肉にも、児童を大変

に大切にする姿勢をもった保育所だった。婦人勤労者としての妻の勤務時間は、必ずしも、その保育所の一般条件ほど単純なものではなかった。というのは、年間を通して、朝も八時には保育所にお願ひするのが毎日であり、帰りも退所時間を過ぎたのちの、夕刻の五時～六時に及ぶことは、日常茶飯事であった。しかし、お世話になった三カ年の間、ついぞ、いやな顔をされることもなく、温情に満ちていた歳月であった。

ここまでの想いをこめてきた保育所として、私は、感謝の念をこめて、あえて、その名を明かしておくべき、義務のようなものがあると考えられるので、明かされる立場にとっては、迷惑至極かも知れないが、そのことを許してもらいたい、と思うのである。それは「港南保育園」（小林璋江園長）である。いまもその謝恩の念は、山よりも高く、海よりも深い想いで、万感胸にせまるものがある。

そこでお世話になり続けた娘達も、今年の四月から、小学校二年生と一年生になるまでに成長した。こ



変容

れからも、娘たちの「学童保育制度」を確立するため
に、横浜市や地域とのかかわりは、さらに続いてゆく
ものとなるであろう。



変容

元町今昔

扇谷 義男

中区元町 横浜生まれ 詩人 62歳

私は横浜に生まれ、横浜で育ち、そして、未だに一度もここを離れたことがないので、いわば、生粋のハマッ子ということになるだろう。それだけに、とりわ